

歌
舞
伎
コ
ン
ト
台
本

ふ
に
や
弁^{べん}
慶^{けい}

平^ひ
野^の
正^ま
喜^き

配役

A 義経よしつね 手に杖を持ち強ごう力りき姿し（作務衣など

でも良い）

B 弁慶 首に長く太い数珠をかけ、懐内

に巻物（ ）を入れた山伏姿（柔道着な

どを工夫すると良い）

広げると歌舞伎の定式幕の3色（黒

・柿色・緑）に染められている

C 狂言作者 黒くろ衣ころもで手に柝き（適当な角材を

切ったもの2本でも良い）

舞台やや上手に床几。

下手より義経と弁慶が主従らしい距

離を置いて現れる。義経はそのまま

厳しい顔で床几に座り、弁慶はやや

下手に平伏する。

義経（弁慶を見て）弁慶、本日の采配、見

事であつた。（下手遠方を見て）皆の

者、ご苦労。よもや富と樫がの追手は来る

まい。下がって休むが良い。（弁慶に

向き直り）さて、

弁慶 ははー。

義経 弁慶、近ちこう。

弁慶 ははー。

ト、弁慶が義経に近づこうとしたと

ころに、狂言作者の柝がちよーんと

入つて、義経・弁慶は動きを止める。

下手より狂言作者が登場。

作者

はいはいはいはい、ちよいとそのまま

で（ト、中央に立ち客席に一礼）。

この2人、ご覧のとおり、源氏の悲劇

の御曹司・源義経みなもと の よしつねと、その忠実なる僕

で知られる武蔵坊弁慶むさし ぼう べんけいでございます。

場所は安宅あたくの関所を過ぎたところ。そ

う、歌舞伎かぶき勧進帳かんじんちようでお馴染み、義

経一行が東北へ逃げ延びていく途中の

ことでございます。厳しい関守せきもり・富樫

の追究を弁慶の機転と度量でどうにか

こうにか切り抜けて、義経一行はやれ

やれというところ。

どうやら義経公は弁慶に話がある様子。

あ、この「ちこうちこう」とは大地の溝とか、

恥ずかしいアカとかいうことではなく、

近くに寄れという意味でございます。

なにせこの2人、千年近く前の人たち

ですから、今とは言葉が違います。

は、この後も、私、狂言作者が時々口

を挟んで解説させていただけましよう。

あ、狂言作家というのは、歌舞伎の作

家・兼・舞台監督という役割で、歌舞

伎の舞台進行の為に、この柝をこう、

ちょーんと打つのも（ト、柝を打つフ

りだけをして）私の仕事でございませ

では、続きをご覧くださいませう。

ト、狂言作者の柝がちょーんと入っ

て、義経と弁慶は動きだす。狂言作

者は二人の後方中央へ。

義経

もつと、近こう。

弁慶

ははー。

ト、弁慶が顔を上げて、そのまま膝

を前へ進めたところで、義経は若者

らしい表情になる。

義経

痛かったぞ、この野郎！あんなに打ち

やがって、日ごろの恨みがこもってな

か っ た ？ (ト 、 ニ ヤ リ と す る)

ト 、 こ れ を 聞 い て 狂 言 作 家 は 前 へ つ

ん の め る 。 オ イ オ イ と い う 顔 で 義 経

を 見 る が 、 義 経 は 気 に し な い 。

弁 慶 我 が 君 、 そ 、 そ ん な こ と は あ り ま せ ぬ 。

た だ 、 こ の 弁 慶 め は 窮 地 を 逃 れ る た め

に 泣 く 泣 く 我 が 君 を 、 杖 で …

ト 、 ア タ フ タ 顔 に な る が 、 義 経 は 計

算 通 り と い う 風 情 で い た ず ら つ 子 顔

で 弁 慶 を な だ め 、

義 経 わ か っ た わ か っ た 。 も う い い か ら 、 い

つ も の 僕 た ち に 戻 ろ う よ 。 他 の 者 は 聞

こ え な い し 、 静しずかも 、 も う い な い よ 。

ト 、 ニ ヤ リ と 笑 う 義 経 に 、 弁 慶 も 表

情 を 崩 し て 、

弁慶 もう、若にはかないまへんなあ。

ト、これを聞いて狂言作家は再度前

へつんのめる。オイオイという顔で

弁慶を見るが、弁慶も気にしない。

で、さ、お前、酒臭いよ、どんだけ飲

んでたんだよ？

いえいえ、これも富樫がすすめる酒、

変に断ると疑われますまいなあ。

よく言うよ、好きで飲んでたذار？

へへ。なかなか美味い酒でございまし

た。ペロリ（唇をなめる）

義経 いいいなー。僕は下戸げこなのに。お前

ときたらガンガン飲んで、踊りまで踊

って、よくまあ、グテングテンになら

ないもんだ。アレか、弁慶はお母さん

の腹の中に3年もいたからそんなにノ

ンベなのか？

弁慶

そ、そんなあ、それとこれとは：

ト、ここで狂言作者の柀がちよーん

と入って、義経・弁慶は動きを止め

る。

作者

なんだか言葉は解説不要の様子でござ

います（ト、苦笑して）。では、2人

の会話の背景のみ説明させていただけ

ましよう。この会話の直前、弁慶は安

宅の関から義経公の主従を先に抜けさ

せ、時間稼ぎをと、富樫に振舞われた

酒をガンガン飲み、酒をついでくれた

富樫の部下からひょうたんを奪い取っ

て飲み干したのでした。これはもう、

明らかに単なるノンベでございます。

しかも、富樫に乞われて舞まで踊り、

最後は六法と呼ばれる踊るような歩き

方で抜けてきたのでございませう。常人

なら、まず、間違いないなくグテングテン

のフーラフラでございました。

そうそう、弁慶ですが、生まれるのに

非常に時間がかかり、なんと、母の胎

内に3年も居たと言われ、おり、生ま

れた時には歯はそろっているわ、長髪

だわ、だったとか。とはいえ、これは

酒の強さとは何の関係があるのやら、

まあ、義経公らしい言い方がかりという

ことでもございましょう。

しかし、義経公はまだまだ言いたいこ

とがあるご様子、どれどれ続きをござら

んください。(ト、柝を打つ)

ト、義経・弁慶は動きを取り戻す。

義経 (ふいに立ち上がって弁慶に迫り) し

・か・も・だ、お前のおねーさんは美

人だそうじゃないか！なぜ、僕に紹介

しない？

ト、ふくれっ面になる義経に、弁慶

は狼狽して、

弁慶　そ、そんなことを、ど、どこで、聞か

れはりました？

義経　こいつだ、こいつ（ニヤリと笑い、狂

言作家を指さす）

ト、狂言作家は狼狽して、柝をちよ

ーんと打ち、義経の動きを止めてか

ら、

作家　（義経を振り返り）え！？気づいてた

こと、バラしちゃうの？　それってマ

ズいでしょ、ぶつぶつ……。ま、いいいか。

（客席に目を戻して口調を戻し）あ、

失礼いたしました。弁慶の姉とは、歌

舞伎いちじょうおおくらのものがたり一條大蔵譚に登場するお京さ

んで、美人妻でありながら一條大蔵邸

に潜入する女スパイ。これは、義経公

じゃなくても（好色そうな顔をして）

一度お目にかかりたいことでございま

しょう。でも（真顔に戻り）確か…、

まあ、ここは弁慶の言い訳を聞いてあ

げましよう（ト、柝を打つ）

ト、義経・弁慶は動きだす。

弁慶 え？（ト、周囲を見回すが弁慶には狂

言作家は見えないらしく、いぶかしげ

に向き直り）若！この弁慶も逢ったこ

とがありまへんのや（泣き出す）。あ

あいう生まれ方したもんですから、お

父はんに殺されそうになり、何とか、

叔母はんに貰われて育ったんで。うう

お姉はん、お逢いしたい、美人ならな

おさらお逢いしとうございます（と、

わーっとな泣き伏せる）

義経（呆れ顔で）はいはい、悪い悪い、ホ

ントにもう弁慶はすぐ泣くよねえ。伏

見 稲 荷 で も ワ ン ワ ン 泣 い て た し さ (ち

よ い と ズ ル い 顔 で)

弁 慶 そ れ は 、 言 わ ん で く だ さ い ま せ な 。 お

恥 ず か し や 。 あ れ は 、 こ の 弁 慶 が 良 か

れ と 思 っ て し た 忠 義 を 若 が 責 め て ぶ ち

打 擲 ちようちやく さ れ た か ら で す わ な 。

ト 、 狂 言 作 家 は さ あ 出 番 だ と 、 柝 を

ち よ ー ん と 打 ち 、 義 経 ・ 弁 慶 の 動 き

を 止 め て 、

作 家 解 説 い た し ま し ょ う 。 打 擲 と は な ぐ る

と い う 意 味 で 『 ぶ つ 』 と 合 わ せ て 『 ぶ

ち 打 擲 』 。 歌 舞 伎 で は 慣 用 句 で ご ざ い

ま す 。 そ し て 、 伏 見 稲 荷 と は 名 作 『 義

経 千 本 桜 』 二 段 目 『 伏 見 稲 荷 の 段 』 の

舞 台 で あ り 、 歌 舞 伎 で は 『 鳥 居 前 』 と

し て 演 じ ら れ ま す 。 こ の 先 段 の 『 堀 川

御 所 の 段 』 に お い て 、 平 家 の 血 を 引 く

が た め に 頼 朝 公 の 疑 念 を 受 け 、 義 経 公

作家

というわけでございます（ペこり）。

ト、義経・弁慶は動きを止める。

（ト、柝を2回打つ）

経の折檻を見咎めて「あ、ハイハイ。

折檻したくもありませんよ。」「（ト、義

弁慶を杖で殴りまくる）。」「そりゃあ、

義経公（ト、義経は動きを取り戻して

ぬは、兄とは決裂するはで怒り心頭の

戻してドヤ顔で見得を切る）。」「妻は死

ヤ顔の弁慶に（ト、弁慶は動きを取り

どり着いたのが弁慶。敵を蹴散らしド

延びたわけですが、そこに、遅れてた

そして、義経公一行は伏見稲荷に落ち

最悪の事態に陥ったわけでございます。

が大暴れしたため、頼朝公との関係は

のはずが、忍んでいた敵を相手に弁慶

の妻だった卿の君は自害。これで落着

ト、義経がまたも勝手に動き出して、

杖を投げ捨て、狂言作家に向かっ

きて胸倉をつかんで持ち上げ、

義経 ええい、説明がグダグダと長い！
「こ

んな理屈っぽいコント、どこが面白い

の？アタのホンっていつもそうなの

よね」とお前の女房に鼻で笑われるぞ。

作家 「へ、狼狽して」な、なんでそれを？

義経 もういいい、このあとは僕と弁慶の会話

が歌舞伎のどの演目なのかだけ言えば

良い！サクサク進めるぞ。

作家 ひえー、かしまりました。

ト、狂言作者が義経の手を振りほど

いて平伏したところで、義経は元の

位置に戻って動きを止める。

作家 もう、「ト、頭を上げて」怖いんだか

ら、「ト、冷や汗をぬぐい」。はいはい

はい（柝を打つ）

ト、義経・弁慶は動きだす。

義経　しかも、静に取り成しを頼んだところ

が、また、情けない！

弁慶　ははー（ト、平伏する）

作家　（柝を打つて）はい、これも㊦鳥居前

（再度、柝を打つ）

義経　（狂言作家を見て）うん、いいリズム

だっ！

弁慶　え？、若、誰に向かって話されたので

す？

義経　（弁慶に向き直り）気にするな。で、

その後、あの船宿で、女の子を跨ごう

とした時さ、

弁慶　あ？、あの、おっかない船宿の！

作家　（柝を打つて）はい、これも義経千本

桜で㊦渡と海か屋い（再度、柝を打つ）

義経　で、足がしびれて、跨げなかつたわけ

だよね。弁慶つて、案外、繊細なんだ

と皆に思われただろ？

作家　（柝を打つて）はい、ここだけは言わ

せて！なんと、安徳あんとく天皇が船宿ふねやどの女の

子に化けていたという無茶な話でござ

います。ト、義経に蹴られて（げ！

義経　だ！か！ら！、解説しなくていいって

言ってるだろ。

作家　これだけが楽しみになのにい、しくし

く（と泣きながら、再度、柝を打つ）

弁慶　そりゃあ、まあ、弁慶はんは勇猛なだ

けと違いますわと、女子おなご衆しゅうから、へへ

へ（ト、にやにする）

義経　でも、あれも僕の指示だったじゃない

か！（ト、弁慶を指さして決めつける）

弁慶　はは！ト、平伏する）

作家　（柝を打つて）はい、これも（言いか

けたところで義経にらまれて（ぐう

（柝を打とうとするが）

義経　（狂言作家を見て）あ、そうだ、ちよ

（ト、口で鼓の音を出す）ポン！ポポ

ン！（だんだんノってくる）

義経（狂言作家に向かつて芝居がかった声

で）またも出おったか、知盛！ええええ

い、恐るべしその執念！

弁慶な！なんですと？（思わず立ち上がった

て周囲を見渡す）ど、どこにも何も！

義経弁慶、そこだ！知盛の幽霊がそこにお

るぞ！（ト、狂言作家を指さす）よ

し、ここだ（能のセリフ風に）『その

時義経！少しも騒がず』（杖を刀の代

わりに構えて）うむ、弁慶、頼むぞ！

作家（さらに芝居がかって、波に漂うよう

に左右に動きながら）また義経をも海

に沈めんと！どろんどろんどろん、ポ

ン！ポン！ポポン！（ト、口で鼓の音

を出す）

弁慶そ、そんな、無茶なあああ（ト、キヨ

ロキヨロしながらアタフタするが、ふ

と、何かに気付いたように落ち着き、

芝居めいた口調になり）かしこまりま

してござります（ト、一礼し、首にさ

げていた数珠を外してもみはじめる）

作家（正気に返って柵を打つて）お、これ

ぞまさしく、船弁慶！（柵を打つ）

弁慶 東方降三世！

作家（柵を打つ）船弁慶！（柵を打つ）

弁慶 南方軍茶利夜叉！

作家（柵を打つ）船弁慶！（柵を打つ）

弁慶 西方大威徳！

作家（柵を打つ）船弁慶！（柵を打つ）

弁慶 北方金剛夜叉！

作家（柵を打つ）船弁慶！（柵を打つ）

弁慶 中央大聖不動明王の索にかけ！

作家（柵を打つ）船弁慶！（柵を打つ）

弁慶 悪霊退散！（ト、見得を切る）

ト、義経は、リズムにノってきた狂

言作家の後方に回り込み、後ろから

突き倒す。

の横に巻物を持つ。

狂言作家はうつぶせのままに柵を打

ち、歌舞伎の幕引きよろしく柵を打

ち続ける。

義経は横から巻物の端を持ち、柵に

合わせて広げつつ、歌舞伎の定式幕

を引く風情で、弁慶と自分の顔を隠

していく。

義経の顔が隠れたところで、狂言作

家が最後に大きく柵を打って、

幕。

参
考

・松竹
歌舞伎上演台本「勸進帳」
「船弁慶」

「義経千本桜」他

《この作品は著作権・上演権を有します。出

版・上演の際には作者（<http://runpog.org>）

または日本劇作家協会に連絡の上、許可をお

受けください》